

## 感性のデータ化(4)

## テンポ変化(その3)

Finaleの「リアルタイム入力」を採譜する「シーケンス採譜」は古いバージョンのものや一部のマッキントッシュ版では「トランスクリプション・モード」となっているので探して見て下さい。

この「シーケンス採譜モード」は背面に常駐する通常の楽譜の前(表面)に提示され、背面にあるデータとは完全に独立しています。従ってこの採譜モードで編集される音符データは本体のシーケンスデータとは拡張子も異なる独立したものです。

前号で示した入力待ちの画面は、背面の楽譜の任意の小節をクリックすることで呼び出せます。この独立したプログラムにも「ファイル」「編集」「MIDI」「シーケンス採譜」「時間ふだ」の5つがメニューバーに現れ、背面の本体のメニューバーはグレーに変わります。

## ステップ1

テンポデータを記録するには、このダイアログの右側にある【演奏】の3つの選択肢から一つ選びます。つまり 最後から録音 パンチイン/パンチアウト 再生 の三つですが通常は【最後から録音】というようにラジオボタンを選択します。【演奏】の下段のブロックには【時間ふだ】のブロックがあります。記録 再生 指定でデフォルトは【再生】になっています。この時間ふだを記録するわけですが、後からつけることも出来ますが、ここではリアルタイムに記録する【記録】というラジオボタンを選びます。

## ステップ2

次は時間ふだのもとになるメトロノームを設定します。メニューから【時間ふだ】を選び下の方にある【メトロノーム信号の入力】を選びます。すると【演奏とタップを区別しない】【ゼロ以外のベロシティをすべて認識する】のどちらにもチェックが入っていますので【演奏とタップ・・・】の方のチェックをはずします。このことで演奏とタップは別の信号として処理される用になります。タップのデフォルトはサステインペダルですが、【実際に弾く】を選んで鍵盤の最端のキーなどに設定することもできます。

## ステップ3

何を演奏するかを決めて下さい。メトロノームだけを記録することも出来ますが、それでは曲の演奏位置が後でわかりにくいので、簡単な単旋律のパートを片手で弾きながら手か足でタップします。【時間ふだ】メニューには・ふだ・拍・小節と次第に大きくなる単位が選べますが、通常は「ふ

だ」で好いでしょう。

## ステップ4

【演奏待ち】のボタンをクリックします。演奏開始と共に記録が開始されますが、メトロノームから飛び出したフライングの音は記録されませんので注意が必要です。失敗して何回もやり直すと「最後から録音」の機能が働いて前の失敗の後ろにどんどん録音してしまいますから、削除するか【ファイル】から【新規作成】でやり直しましょう。通常時間ふだを作る前の画面は次の通りです。



実際はデータを選択したときだけ選択されたデータがこのような白黒が反転します。

## ステップ5

今回は最初から時間ふだも一緒に録音していますので次のような画面になります。



この画面上に並んでいる音符が【時間ふだ】です。この場合は4分音符に固定していますが実際の音符と同じ長さで自由に付けることも出来ます。その場合は【拍】を【ふだ】の上にかきこむことになります。【時間ふだメニュー】から【拍】を選んで演奏させながら【拍】を書き込みます。書き込まれた拍はふだの上に【>】のアクセント記号として書き込まれます。

#### ステップ6

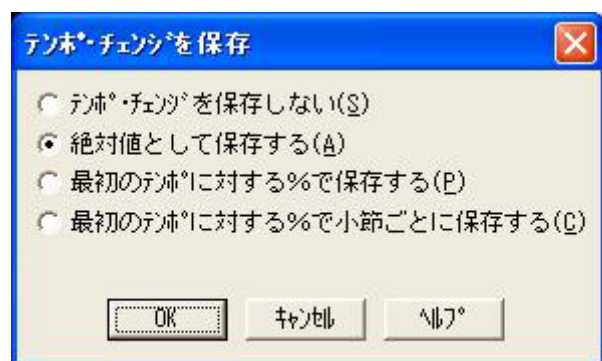
次は小節線を設定します。



上図のように【拍子記号を小節ふだに割り付け】を選ぶと一瞬で【M】即ち小節線が設定されます。これで好ければ次の【採譜】に進むわけですが、やり直すときは「すべてのふだを消去」を選んでやり直して下さい。

#### ステップ7

上の図の【テンポチェンジを保存】にチェックが入っていることを確かめて下さい。これがチェックされていないとすべての努力は水の泡となってしまいます。



バージョンの違いで表示は異なるかも知れませんが、チェックを入れるとこのような表示になり、要するに【絶対値として保存する】を選べば好いのです。

後は【採譜】というボタンを押せば楽譜に変換し始めます。変換が終わると最初のFinale画面で作成中の楽譜の段の指定した小節から楽譜になって現れます。

試しに【再生】ボタンで再生してみてください。見事に楽譜には見えないテンポ変化で演奏されるでしょう。

#### ステップ8

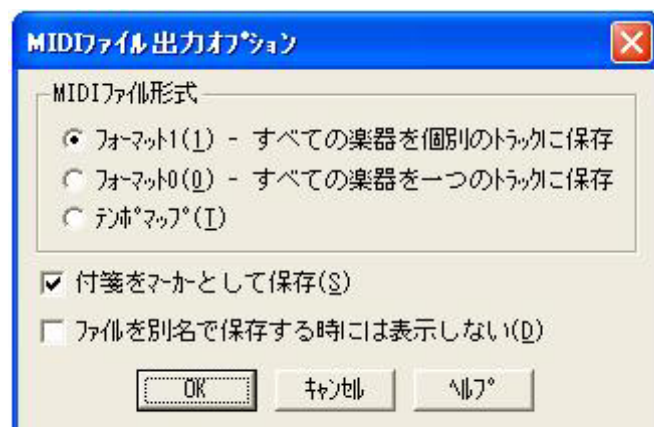
さてここまでは順調に進んだ事と思います。拡張子が【.NOT】のファイル名でここまでを保存しておけばいつでもこの作業は再開できます。

ここから先は詐欺のようですがあまりうまく行きません。というのは確かにテンポ変化のデータを持った楽譜が出来たのですが、それをSMFファイルとして保存するとせっかくのテンポ変化が消えてしまうのです。MacでもWinでも試して見ましたが、駄目でした。ですからこの

ファイルはあくまでも【.MUS】の拡張子を持つFinale上でしか有効では有りません。言い換えればFinaleというかこの外には抜けられないのです。

しかもやっかいなことに一度別のシーケンサで作った曲をMIDIシンクロさせながら外部から入力しても手で弾くのと同じリアルタイムの採譜が可能なのですが、同時に入力できるトラック数が4と制限されてしまいます。

以上のことからこの方法は4トラック以内の例えば室内楽やピアノ演奏にはうまく使えますが、大オーケストラや編成の大きなものには使えません。MIDIファイルと



して出力するためのオプションに3種類あって、フォーマットの0と1は実際にその通り保存出来ますが、再生するとテンポ情報が消えています。【テンポ・マップ】という本来テンポ情報だけを記録する保存形式で保存したものは何のデータもありません。

現段階ではこのテンポトラック作りはFinaleの環境の中でしか使えませんがやってみるとなかなかおもしろいものです。

既存のシーケンサファイル(小節管理が出来ていないもの)には一つトラックを追加するかチャンネル1にタップに使う鍵盤の右端の高い音などを拍の頭とわかっている音符と同じタイミングに付加しておき、それを使って別のシーケンサなどから入力すれば拍の時間ふだが発定したファイルが作れます。勿論あとでクアンタイズしてしまうとテンポ変化は使い物にはなりませんが・・・